

---

# 殺してやる（極大修正版）

プロク

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

殺してやる（極大修正版）

### 【Nコード】

N6056B

### 【作者名】

プロク

### 【あらすじ】

夢の中で、コロシテヤルと声がする。それは人類全体に聞えてきた。その声の殺意に人類は滅ぼされるのか？

何もない暗闇を昴すばは逃げる。誰かが殺そうとして追いかけてくる。昴はひたすら逃げる。そして、声が響く。

### コロシテヤル

弾かれたように目が覚め、飛び起きる。ベットの上で、ぬめるよ  
うな冷や汗をかいていた。恐怖心に突き動かされ周りを見渡す。自  
分の部屋だった。朝日がこぼれる静けさの中で、小鳥のさえずりを  
聞きながら自分の手を見ていた。恐怖心が薄らいでいく。時計を見  
る、六時三十分、ベルが鳴る前に起きてしまった。

「怖い夢を見た……」独り言を呟く。

夢を思い出そうとしたが、恐怖から逃げていたことしか分からな  
かった。全身に張り付く汗が不安をかきたてる。しばらく布団にく  
るまって、夢のことを考えていた。何も理解できないまま目が冴え  
てきたので、起きて着替えをする。ねっとり張り付く下着を脱い  
で、タオルで汗を拭く。腕に鳥肌が立っていた。九月なのに、寒い。  
学生服を着る頃には寒さも引いて、夢の事も気にならなくなって  
いた。そして、二階の自室から降りてキッチンに行く。

「おはよ、お母さん、今日は何？」

キッチンで忙しく朝食を作っていた母が振り返る。

「今日は早いね。揺すつても起きないくせに」

「俺も成長したんだよ」

あきれ顔の母は続ける。

「毎日、そうならいいのにな」

「朝ご飯何？」

「目玉焼きにお味噌汁」

いつもの朝食だったので、のりも付けてもらった。

椅子に座り、朝のワイドショーを見ながら朝食を食べていた。TVの上にある時計を見ると、もう出かける時間になっていた。足元の靴を拾い上げ、家を出てバス停へと急いぐ。すっかり夢の事を忘れていた。

毎朝、幼馴染の美咲みさきと同じバスに乗り通学するのが嬉しい昴だった。今日も、同じ時間にバス停に行く。そして、幼馴染の美咲が待っていた。

二人は、親同士の近所付き合いが元で。幼稚園からお互いの家で遊び、小学校では仲のいい幼馴染として楽しく遊んでいた。中学生になる頃、昴は美咲を異性として意識し始めた。そして、今までのような気楽な会話が出来なくなり、会話が少なくなっていた。また、昴に男友だちが増え、一緒に遊ぶことも少なくなっていた。自然と、二人の距離が徐々に離れてしまった。

ある事件が切っ掛けで元に戻ることになった。それは、中学二年のある日のこと。美咲が校舎裏の、薄暗い角で泣いているのを昴が見つけた。心配になって美咲に話しかける。一人で泣いていた美咲が、昴の優しい声に触れて話はじめる。クラスが別だったため何も気が付かなかった昴だった。

話を聞いて、いじめを受けている事を知る。いじめの原因は些細な事だったが、それが元でいじめのターゲットにされてしまったらしい。いろいろ話している内に、昴は（美咲を守るのは俺しか居ない）と決意していた。話が終わる頃、昴は美咲を連れていじめの主犯グループの所にいき。怒りながら文句を言う。そして、最後に「美咲をいじめるやつは許さん、美咲は俺が守る」と宣言してしまっ

た。今から思うと、衝動に駆られ、恥ずかしいことをしたと思っている。これで、いじめが無くなった訳ではないが、クラスで孤立した美咲のために、昔のように一緒に登下校を行い。休み時間も美咲が

一人で居る時はいつもそばに居るようにした。暗かった美咲も徐々に明るくなり、いじめも無くなってきた。そして、学年が変わった時から友達も増え、元の美咲になっていた。この事件から、昴は（美咲は俺が守るんだ）と決めていた。

歩道沿いの、バス停に近づき挨拶をかわす。

「おはよう、美咲」

バス停の横に居た美咲は、笑顔で挨拶をする。

「おはよう」

昴はふと美咲の鞆に目をむける。子ネコの鈴が付いていた。それを見た昴は昔を思い出す。

中学三年の時、美咲と一緒に縁日に出かけた。二人で屋台をのぞいていると、美咲が子ネコの鈴をかわいいと言って、手に持って眺めていた。それを見ていた昴は「よし、美咲にプレゼント」と買って買って渡す。美咲は満面の笑みを浮べて喜んだ。その頃から、昴は美咲に対して恋心が芽生え育っていった。しかし、今の関係が壊れるのが怖くて、とても言い出せないでいた。

美咲もまた。むかし、いじめを救ってくれた時。昴の優しさに惹かれ恋心が育っていった。しかし、美咲も同じように、今の関係が壊れてしまうのが怖くて、言い出せないでいる。そして、子ネコの鈴を大切に持っていた。

今では、二人とも仲のいい幼馴染でいることに、一番の幸せを感じていた。

昴はバス停に着き、美咲と並んで話しはじめる。

「次の日曜、町内会の掃除出る？」

「もちろん出るよ、昴は？」

「朝が苦手だけど、出ないと親に怒られるし、仕方ないか」

「そうそう、やるべき事はちゃんとやる」

元気そうに話す美咲だったが、心なしか顔色が悪そうな気がして

声を掛けた。

「あれ、元気がなさそう？」

「うん、そんな事無いよ」

そか、と軽く返事をする昴だった。

しばらくするとバスがやってきた。二人はバスに乗り込むが、混んでいたの、二人ともつり革につかまった。窓越しに見える、いつもの通学風景をのんびりと見ていた。そこに声が。

コロシテヤル

突然の声に一瞬硬直する昴。朝の悪夢がかすかに頭をよぎった。誰が言ったのか分からない。だが、確かめずにおけない翼は、自分の周囲を見始めた。見知らぬ人と目が合ってしまった、思わず目を伏せる。そして、隣りの美咲を見た。

美咲は一瞬、困ったような、何か訴えたいような表情でこちらを見たが、すぐに目を伏せてしまった。顔色がさつきより悪そうだった。美咲も今の声を聞いたのだろうか。と思い悩む昴であったが、バス内で聞くこともできずに昴も目を伏せた。重苦しい沈黙が車内に漂っていた。

バスは何事もないように、西が丘高校前に着き、二人は無言のままバスを降りる。

校門に向かって歩道を歩き始める。左側には校舎と校庭があり。学校は小高い丘の上に立っているため、右側には町の様子が遠くまで見えていた。いつもの騒々しい登校風景よりは、いくぶん静かな感じであった。美咲も静かに昴の隣りを歩いていた。そして。

コロシテヤル

息を呑んで立ち止まる二人。間違いなく聞えた。昴は慌てて周りを見渡す。誰が言ったのか確かめようとした。見渡す限り、皆も立ち止まって周りを見ていた。

みんなも聞えたようだ。しかし、誰が言ったのか分からない。回りも不思議そうに見渡している。昴は状況が理解できないため、苛

立だっていた。

「くそ、殺してやるって何だ！」

思わず、声に出してしまった昴。

隣りにいた美咲が、びくっとして昴を見ながら後づさる。

はっと、我に帰った昴は美咲を見た。脅えた表情でこちらを見ている。

思わず言ってしまった言葉が、美咲を不安にさせたことを後悔する。

「ちがう、俺じゃない」

その言葉を聞いた美咲が小さな声で聞く。

「誰が言ったの？」

わからない、と首を振りながら答えた。

昴は再度周りを見渡した。立ち止まって周りを見渡す人、友達と話をする人、静かに学校に歩き始める人、それぞれの行動を取っていた。昴は美咲に聞いた。

「美咲、もしかしてバスに乗っていた時、同じ言葉を聞いた？」

しばらく周りを見ていた美咲が答える。

「空耳だと思っていたけど……」

不安そうに見つめる美咲。昴は少し離れてしまった美咲に気を遣いながら話をつづける。

「聞えるのは、二人だけじゃなく、全員聞えるみたい」

うん、と静かに答える美咲だが不安は消えなかった。

「誰が言っているんだろう？」

首を横に振るだけの美咲だった。

会話も止まってしまい。二人は静かに学校へと向かった。

昴は考えていた。

（殺してやるって、なんだよ、誰が言っているんだ、みんなに聞えたいんだけど、何で全員聞えながらも、誰が言ったのか分からないんだ。美咲は離れて歩いてるし、いったい何なんだ）

美咲と離れてしまった原因の声に、憤りを感じながら昴は歩いて

いた。

二人は同じクラスの二年三組、校舎の二階だった。昴の席は窓ぎわ後方、美咲の席は廊下近くの後方だった。教室に入ると、声の話題で教室中騒がしかった。数名のかたまりが幾つもあり、会話をしていた。昴も集団に入って、少しでも新たな情報が欲しかった。しかし、誰もが聞き、誰もが不明だった。残念ながら、新しい話は無かった。確かなことは、全員が同じ声を、同じ時に聞いたことだけだった。

古めかしいスピーカーから授業開始のチャイムが流れる。波が引くように静まり、各人の席に座りはじめた。

一時限目の授業が始まる。

先生が話す。

「今日は、教科書の二十三ページ……」

その時。

コロシテヤル！ コロシテヤル！

一瞬にして、教室が暗闇に飲み込まれたように静かになる。

（今度は、はっきり聞えた、それも殺意まで伝わってきた）

昴は理解できない感情と、恐怖に襲われた。

一瞬の静寂の後、蜂の巣のような騒ぎになる。

窓際の生徒が立ち上がって喚く。

「誰だよ、殺してやるって！」

それを聞いた女生徒が、いや と悲鳴をあげる。ある者は立

ちかけ、ある者は机に伏せる。「誰なんだ！」と喚く生徒。ひたす

ら周りを見る生徒。固まった様に動かない生徒。立って騒ぎ出す者

震えて机にしがみつく者。そして、誰かが先生に聞く。

「先生！、この声は何？」

先生は、黒板にしがみ付き大きく見開いた目が空中を彷徨っていた。そして。

コロシテヤル！ コロシテヤル！ コロシテヤル！

強烈な殺意と言葉が頭の中に響いてきた。殺意も声も止まらない。強烈に頭の中に響く言葉と殺意によって、昴は立つ事も喋る事もできなかった。机にしがみつき、湧き上がる恐怖に己を見失いかける。しがみつくことでしか自分を維持できなかった。自分を押さえつけながらも、耳には悲鳴や机や椅子の倒れる音、人が倒れる音を聞いていた。そして、恐怖の感情が少しだけ抑えられるようになり、顔を上げて周りを見る。

クラスメイトの多くが机にしがみついて震えていた。床で丸くなくて震えてる人。泣いている人。喚く人。先生は教壇の下でうずくまっていた。

そして、美咲を見た。美咲もまた机にしがみついて震えていた。昴の心の中に。

（美咲を助けなきゃ）と言葉が跳ねる。その思いが強まり恐怖心が弱まる。その時。

最前列で雷のような音とともに机が壁に当たる。座っていた誰かがカッターを持ち振り回し始めた。

「殺せるもんか、殺せるもんか、殺せるもんか」

と、喚きながら右へ左へカッターと振り回す。

ギヤーと悲鳴が上がる、誰かの肩が切られ鮮血が飛び散る。そして周りの机が倒れ、椅子が飛び散乱する。一瞬にして教室全体がパニックになる。昴も無意識のうちに椅子から離れ窓際に逃げた。半狂乱で暴れる生徒を見ながら、昴は美咲の事を考えた。

（ここは危ない、美咲と出よう）

気が狂いそうな殺意の声とパニックの中、美咲の事を考えると、恐怖が少しだけ薄れていく。美咲は廊下側の教室の隅で震えていた。美咲の所に行こうとしたが、恐怖で手足が素直に動いてくれない。美咲を助けたいと強く思い、震える手足に力を込める。そして、美咲の所に這いずっていく。

「美咲！ 美咲！ ここを出るぞ」

美咲はゆっくりとこちらを見た。恐怖で顔面蒼白だった。昴を見

て顔が少しほころんだ。

「ここは危ない、出るぞ！」

美咲は震えながらも小さくうなずく。そして、美咲の手を取った。美咲もその手を力強く握り返してきた。恐怖に打ち勝とうと、二人の手は強く結ばれた。

二人で寄り添いながら廊下に這い出す。右を見ても左を見ても教室から生徒が這い出して来る。ガラスの割れる音、悲鳴、怒鳴り声、叫び声、机の倒れる音、どの方向からも聞える。どの教室もパニックになっていくに違いない。殺意の声は止むことも無く強烈に頭に響いている。

二人で手を握り支えあうことにより安心感が生まれた。手足の震えも収まってくる。廊下の壁を支えに立ち、右側の階段に向かってゆっくりと歩き始める。昴は励ますように美咲に言う。

「家に帰ろう」

美咲はうなづく。

二人で支えながら階段を下り、校舎の外に出た。そして校門まで移動する。校門から見える景色は、高台の上から町が遠くまで見渡せる。いたる所で煙が上がっていた。事故だ。昴は絶望的な状況を理解した。

（狂っているのは、学校だけじゃない）

救急車のサイレンも、消防のサイレンも、警察のサイレンも聞えない。町が何も機能していない事を理解してしまった。バス停まで歩いてきたが、この状況ではバスが来そうに無い。昴は話す。

「美咲、事故を避けながら、人や車を避けながら歩いて帰ろう。いいか？」

美咲も事態を理解しているように、軽くうなずき歩き始める。

家までの道のりは遠い。二人は周りを気にしながら静かに歩く。殺意の声はさらに強く二人に襲い掛かっている。そして恐怖心が、周り総てを恐怖の対象に変えてしまう。物音一つに硬直し、立ち止

まって周りをうかがう。人の叫び声に恐怖し体が逃げる。車の急ブレーキの音に全身が凍りつき。事故の音に驚き震え、膝が折れそうになる。二人の繋がった手のぬくもりや、体の暖かさだけが、心に安心を与える希望だった。

その頃、美咲の家では母が半狂乱の状態になっていた。

美咲が学校に出かけてから聞いた、最初の声は空耳だと思い、母は廊下を掃除していた。二回目の声で手が止まり、周りを見てから各部屋を見はじめた。三度目の声で恐怖に立ちすくみ、警察に連絡しようと思間にある電話に走る。

そして、直ぐに強烈な殺意の音が始まり、止まらなくなる。あまりの恐怖に、母はその場で伏せてぶるぶると震えていた。しばらくして体が動きはじめると、キッチンに駆け込み、包丁を手に取り壁を背にして立ちすくむ。そして、キッチンの奥に移動して隠れるように座り、包丁を構えて震えていた。

殺意の声をたった一人で耐えることは不可能だった。恐怖のあまりに、わずかな物音に体が硬直し包丁を振り回す。外からくる叫び声にすくみ上がり膝を抱えて震える。強烈な殺意の声と恐怖に精神が耐えられなくなり、幻覚を見、幻聴を聞き始めた。何を見ても自分を殺害する怪物に見え、殺意と恐怖に母の心は壊れ始める。

しばらくして、母は乾いた笑い声と共に、ふらふらと居間に歩き出した。そして、自分の喉を包丁で突き、崩れ落ちるように倒れた。美咲たちが来る十分前のことだった。

昴たちは、家までの長い距離を、奇声を上げる人を避け、車を避け、事故を避け。あるときは家の陰に隠れて、二人で震え上がり。ある時は、パニックになった人たちから逃げるように走り。ある時は、崩れ落ちそうになる心を励ましあいながら、家路を急いだ。二人にとって、お互い無くてはならない存在であった。美咲にとって昴は、かけがいの無い頼れる存在であり。昴にとって美咲は、守ら

なければならぬただ一人の存在であった。

町から少し離れ、まばらに家が立つ地域に昴たちの家がある。美咲の家が見えてきた。外見的に異常な状態は見えない。そして美咲の家の前に着く。美咲を家に入るようにうながすが、震える美咲は離れようとしなない。二人で支えあっているからこそ、殺意と恐怖の中、狂う事も無く歩けるのだと昴も理解した。

「一緒に入るか？」

昴の手にしがみつきながら、うなづく美咲。

二人で玄関を開け、靴を脱いで廊下にかかる。

「おかあさん、おかあさんどこ？」と、問い掛けていた。母の返事は無かった。

美咲は精一杯の声を出していたが、か細く小さな声だった。

廊下を進み居間に入る。そこに美咲の母がうつ伏せに倒れていた。

「おかあさん！」

美咲が駆け寄る。母は動かなかった。床と服に血のりがべったりと付いていた。美咲は母を揺すって叫びつづける。

「おかあさん、おかあさん、おかあさん、おかあさん、おかあさん、

蒸せるように泣き始めても、呼びかけることを止めない。

「おかあさん、おかあさん、おかあさん、おかあさん、ああ」

一人になった昴の頭に、殺意の音がますます強烈に響いてくる。

耐えがたい殺意と、そこから生まれる恐怖に、心が耐えられないと悲鳴を上げる。今見ていることが現実なのか妄想なのか分からなくなってきた。

（俺は狂っているのか？ 目の前にあるのは何だ？ 美咲と死体？

どうして？ 何故？）

自問自答を繰り返す昴は、その場で崩れ落ち、膝をついて頭を抱えた。

美咲はいつまでも叫び、狂ったように泣いていた。

昴は美咲の状況を、まるで幻覚のように感じはじめていた。涙を流しながら、なす術も無く虚ろな目で眺めていた。

（俺はおかしくなっているのか？、何をしたらいいんだ、分からない…… 美咲に何をしてもやれるのかも、分からない……）  
今の昴にとって、目の前の美咲のことだけがたった一つの拠り所であった。

強烈な殺意の中、現実離れた感覚が昴を襲う。世界が揺れ動き、並行感覚が無くなり、めまいに揺れ、幻覚が見え、幻聴が聞こえ始める。耐えがたい恐怖の中、うつろな目で美咲を見つめる時間が過ぎ去っていく。ふと気がつくと、美咲は泣くことをやめて母の上に覆い被さっていた。

美咲を守らなければ、美咲を守るんだ。と、繰り返し心が言っていた。それがたった一つ残った昴の理性であった。

そして、昴は呼ぶ。

「美咲」

返事が無い。また呼ぶ。

「美咲」

ピクリとも動かない美咲を見て、昴の理性がわずかに戻ってくる。美咲に近づき、美咲を揺すって呼びかける。しかし、何の反応も無い。

美咲を抱きかかえ、顔を見て呼びかける。目には光が無い。顔には、涙と鼻水とよだれが流れるままになっていた。美咲の意識が何処かに消えてしまってる。なんの反応もしなかった。昴は絶望の中に落ちかける。

（もう駄目なのか？ これでおしまいなのか？ 死ぬのか？）

ふと右手を見ると、血がべったりと付いていた。前に倒れている母の首から、大量の血が流れて床に大きな血だまりができていた。昴に残るわずかな理性が、ここに居てはいけないと告げる。居間の向かいに美咲の部屋がある。そこに美咲を連れていこうと、妄想のような思いが昴を突き動かす。美咲を引きずり、美咲の部屋に入る。美咲はまるで壊れた人形のように成すがままに引きずられていく。

美咲の部屋に入り、壁を背に美咲を座らせた。右手で扉を閉め、昂も隣りに倒れこむように座る。そして、美咲の胸に耳を当てた、鼓動が聞える。虚ろな顔の昂に、ほんの少しだけ笑顔が現われる。美咲に呼びかける、返事が無い。しばらくして、昂の目からも光が失われはじめる。

（静かだ、何も聞えない）

そう思ったのもつかの間、殺意の声がよく見える。昂は過酷な状況に放心状態のような、夢遊病患者のように行動していた。わずかに理性を取り戻した昂に、前よりも強烈に殺意の声が響く。抑えがたい殺意の声に理性が吹き飛びそうな昂だった。美咲の手を、思いつきり握り締めて耐える。しかし、心が押しつぶされていく、暗闇に飲み込まれそうな昂が呟く。

「俺、もう駄目かもしれない」

昂は最後の力で、美咲を揺らしながら呼ぶ。

「美咲、美咲、美咲！ 美咲！ 俺もう、美咲を守れそうに無い、ごめんな」

そして、昂の目から光が消える。心が殺意の声に飲み込まれたのだ。もう、動く事も話すことも考える事もできなくなった昂は、人形のように倒れた。

心を食われた二人は、その場で折り重なるように動かなくなった。

数日後。

美咲の家のキッチンで、もぞもぞと動物のように動く影があった。だらしなく水を飲み、冷蔵庫の野菜をかじり、ソーセージをむさぼり食べる姿があった。

目に光は無く、髪は乱れ、衣服は食料で汚れ、まるで原始人のような姿だった。その、心に　　私たちは死なない。と、何処からとも無く声が響いていた。個人としての人格を見失っていたが、

何千万人も心を感じていた。心の奥底にある人間としての共通意識に触れた者のみが、殺意の声に対抗できた。しかし、個人としての理性はどこにも見られない。

食事が終わった後、不器用な手つきでコップに水を入れ、美咲の部屋に走る。

そこには、壁の前で横向きに倒れている昴が居た。

不器用な手つきで昴の口に水を流す。しかし、水は口から溢れてこぼれるだけだった。コップを持つ手の上に、大粒の涙がぼたぼたと落ちはじめ。光がまだ戻っていない目には涙が溢れていた。その顔は美咲だった。流れる涙が美咲の手にぼたぼたと落ちる。美咲の心の奥底に、昴が最後まで守ってくれていたこと。守るために話していた言葉が残っていた。どれほど昴が大切であったか、心が覚えていた。その思いが深い悲しみとなって溢れるような涙を流している。

昴は動かなかった、それでも美咲は、昴の口に水を流す事を止めなかった。

（了）

(後書き)

前回の極大修正版です。元文は僅かしか残っていません。  
落ち、落ち……、どうなんでしょう？

別の方に落ちて欲しいんだけど……どうだろうか？

殺してやる(極大修正版)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6056b/>

---

殺してやる（極大修正版）

2008年11月7日08時28分発行